新聞とアンケートにみられるツキノワグマ被害に対する認識

水野昭憲　石川県白山自然保護センター
前田和佳　奈良大学文学部地理学教室*
田中敏之　金沢大学理学部生物学教室
野崎英吉　石川県白山自然保護センター

A RECOGNITION OF THE BLACK BEAR TROUBLES AMONG THE RESIDENTS AND THE NEWSPAPER IN ISHIKAWA PREFECTURE

Akinori MIZUNO, *Hakusan Nature Conservation Center*
Kazuyoshi MAEDA, *Department of Geography, Faculty of Letters, Nara University*
Toshiyuki TANAKA, *Department of Biology, Faculty of Science, Kanazawa University*
Eikichi NOZAKI, *Hakusan Nature Conservation Center*

ツキノワグマは，全国的には森林害獣とみられることが多く，そのことが駆除の力を強め，多くの地方で分布域や生息数の減少に結びついている。けれども白山山系から東北地方にかけての日本海側では，大きな林業被害は報告されておらず，出没による恐怖や人身被害が話題となっている。また筆者らが普及活動等を通じて感じることは，クマの生態や動向については市民一般には知識が浅く，多くの誤解のあることである。石川県でも，特に市街地住民の間には，クマは肉食であり，よく人を襲う猛獣であると考えている人が多い。

白山のツキノワグマの生態は，テレメーターの導入（野崎・水野 1983）などによって次第に解明されつつある。しかしながら，クマそのものの生態と同時に，クマ被害の実態，さらには住民のクマに対する考え方が，保護管理の方策を大きく左右する――つまり，クマの保護管理対策を実行するにあたっては，被害の形態・程度とその対策，また住民の認識や広く社会的なクマのとりあげ方を把握検討しなければならないと考える。

本報では，石川県内のクマ被害を知るため，そして広く県民がクマの情報や知識を得る機会の最も多いものとして，新聞にとり上げられたクマの事件の形態を調査した。またアンケートによって，県内のクマに関する県民の知識と保護管理に対する意識を分析した。

この調査は，環境庁委託「森林環境の変化と大型野生動物の生息動態に関する基礎的研究」（昭和 58 年度）及び，奈良大学文学部地理学科卒業研究（No. 773127）の一部として実施したものである。

なお，快くアンケートに回答いただいた方々，並びに記事の収集に協力いただいた北国新聞社に深く感謝申しあげる。

I　新聞に見られるクマの情報

1　方　　法

石川県内で最も読者数が多く，県内記事に多くの紙面をあてている北国新聞（発行部約 31 万部，県内シェア約70%）の同社内スクラップ及び縮刷版からツキノワグマを主題にした記事を拾った。1964

*現住所　金沢市子来町 9

年から1983年の20年間にわたって，県内の野生のクマに関するものに限って収集し，内容によって出没，人身被害，農林被害，駆除（捕獲），生態（調査研究を含む）及び保護に分類した。同一事件をくり返し報道したものは1件とした。

2　結　　果

ア　件　　数

調査した20年間の新聞紙面から，クマに関係した記事173件を得た（表1）。内容別件数は出没したというもの77件（39.0%），駆除又は捕獲したというもの64件（32.5%）が多い。以下農林被害22件，生態に関するもの21件，人身被害10件，保護の話題3件であった。親グマを捕殺又は追っぱらって仔グマを生捕りにした場合にも記事では保護したという表現がしばしば見うけられるが，それは駆除に分類した。

石川県においてクマの出没，被害又は駆除が新聞にとりあげられた20年間の160件について，年次別件数と月別頻度は表2のとおりである。年別では1970年，77年，そして82，83年が他に比較して多くなっており，これらの年はいずれもいわゆる異常出没の年として騒がれている。この現象は石川県だけでなく，富山県でも1970年は人里へのクマの出没が極めて多く，困った年であった（湯浅1972）。また1982，83年には秋田県等東北地方でも異常出没といわれ駆除数が急増している（秋田県資料）。この異常出没の原因については，秋季の山の果実類の作柄が重要であると考えられていることが多いが，因果関係を明らかにした研究はなく，不明な点が多い。

月別の出没頻度では6月をピークに5月から8月にかけて多くなる。これはクマの行動域調査などから知られているクマの行動範囲が広くなる季節と一致する。安定した良質でまとまった量の食物の少ない季節に食物を求めて広範囲を移動する結果，人との接触や農業地への出没機会が多くなるものと考えられる。

石川県内で新聞にとりあげられた出没・事件発生地の分布を国土数値情報第三次メッシュに記入すると図1のようになる。出没が被害につながったり，事件としてとりあげられるのは，クマの分布地域（石川県1983）の周辺部に集

表1　20年間のツキノワグマに関する新聞記事内容
（173記事のうち内容が多岐にわたるものは最大2項目までに分類し197件とした。）

内　　容	件　数	%
出　　没	77	39.0
人身被害	10	5.1
農林被害	22	11.2
駆除・捕獲	64	32.5
生態・研究	21	10.7
保　　護	3	1.5
計	197	100.0

表2　新聞に見られるクマの出没・被害・駆除
（表1においても，複数内容に分類したものについても1記事として集計した。）

年	記事数	月	記事数	うち人身
1964	5	1	3	
65	2	2	0	
66	1	3	6	1
67	2	4	13	2
68	9	5	26	2
69	2	6	32	3
70	19	7	20	2
71	5	8	20	
72	8	9	12	
73	5	10	9	
74	8	11	12	1
75	8	12	7	
76	6	計	160	10
77	14			
78	5			
79	9			
80	9			
81	4			
82	13			
83	26			
計	160			

中している。またこの地帯は生息密度の低い地域であるが人間活動地域との接点にもあたっている。

イ　被害内容

過去20年間の石川県内における出没・被害・駆除の記事160件のうち，物的な被害が記録されているものは43件あった。被害内容を表3のとおり分類すると，最も件数の多いのは人身被害の10件である。このうち5件が重傷を負っているものの死亡例はない。人身被害の発生は表2のとおり4月から7月にかけて多く，3月と11月に各1件が起っている。これは福井県における1970年から83年の16例でも同様の傾向にある（林1984）。

表3　新聞にみられるクマ被害

被　害	件　数	備　考
人身	10	
車	5	
養蜂	6	
家屋	2	
墓	2	
カキ	8	
ブドウ	3	
その他果樹	4	クリ，モモ，スモモ
畑	2	スイカ，サトイモ
杉	1	皮剝ぎ
計	43	

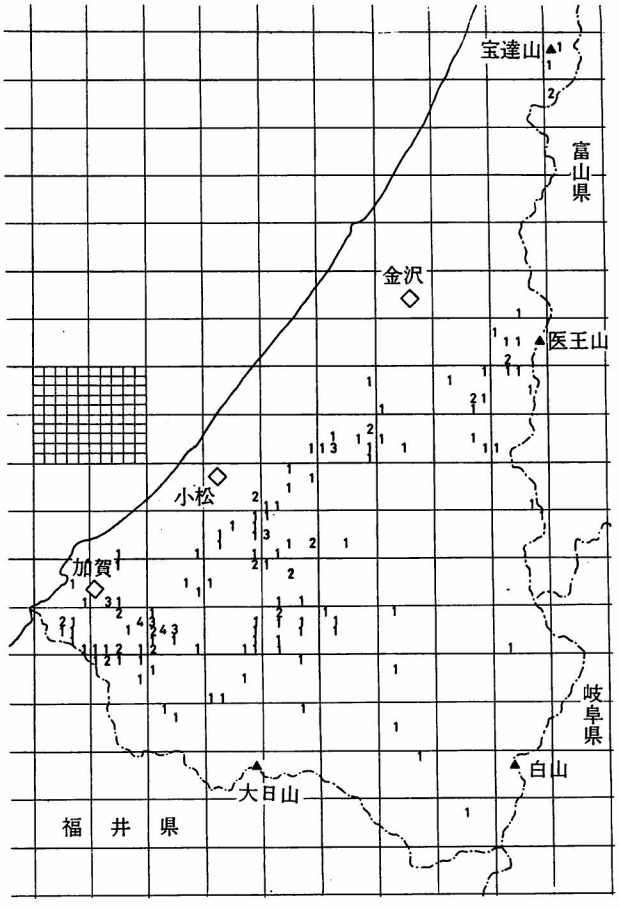

図1　新聞記事にみられるツキノワグマの出没・被害発生地点
（数字は1964年から1983年までの第三次メッシュ毎の記事数）

春から初夏の人身被害は，当事者や駆除隊の話からみてほとんどがその年の冬生まれの仔を連れた母グマに接近しすぎて逆襲されたもので，他のケースはむしろ珍らしい。まだ単独で逃げることができない仔を連れたクマが最も危険で，春から初夏の事件9件のうち6件は明らかに仔グマを確認しており，他の1件も足跡から仔づれだったと推察されている。

養蜂被害は6件出てくるが，この他にも被害を受けたという情報や有害鳥獣駆除の申請は多い。白山山ろくでは春に上質のトチの蜜を求めてかなりの奥地へ蜂箱を持って行く養蜂業者があり，そこを荒らされることから，金沢市では鉄製檻によって駆除を実施している。

車と衝突又は接触した事件が5件あり，うち2件は北陸自動車道での事故である。

家屋を荒らされた2件と墓を破壊した2件は，ともにミツバチ又はジバチ（クロスズメバチ）の巣をねらったものである。新聞にはとりあげられていないが，これ以外にも小松市山間部では，夏季に墓石の中のハチの巣を採食に来るクマがおり，気を遣っているところがある。

果樹の被害で最も多いのはカキであるが，自家用あるいは廃村に残された木に来るものであり，大きな問題にはなっていない。平素クマのいない地域でクマが人家近くへ来てカキを採食した場合は話

題となっているものの，近くにクマが生息することが知られている山間集落で晩秋にカキの木にクマが登ることは珍らしくなく，新聞にとりあげられるような話題にならない。ブドウとモモについては加賀市方面で被害が出ているが，これらは商品作物であると同時に，果樹園が人家の多い地域にあるのでわずかの被害でも騒ぎは大きくなる。

II　アンケートにみられるクマに対する県民の認識

1　方　　法

クマに関する住民の認識を把握するため，石川県内の住民に対して，面接聞きとりによるアンケート調査を実施した。調査は1980年9月から10月に金沢市，小松市，能美郡辰口町，石川郡鶴来町，吉野谷村，尾口村，白峰村の7市町村において行なった。年令・性別・職業の片寄らないよう考慮の上，調査地に居住している人で，訪門し接触できた197人から回答を得た。

設問は表4のとおり9項目で設問用紙を持ち調査者が口頭で聞きとり，記入する方法をとった。この調査が保護など特定の考え方を期待していると考えられないよう，簡潔な聞き方をし，一人の聞きとりに5分ないし10分を費やした。回答者の地域別，男女別数は表5のとおりであった。なお集計にあたっては，地域の特性から，金沢市・小松市を市街地，辰口町，鶴来町を山麓の町あるいは中間地帯，そして吉野谷村・尾口村・白峰村を山村とした。

表4　ツキノワグマに関するアンケート聞き取り調査票

地　域	（　　）
性　別	男　　女
年　齢	才
職　業	（　　）
1　あなたはよく山に行きますか。	行く（内容　　），行かない
2　野生のクマを見た事がありますか。	有　（所　　），無
3　あなたの市町村にはクマがいますか。	いる　，　　いない
4　クマは有害な動物だと思いますか。	はい（内容　　），いいえ
5　クマはおもに何を食べていると思いますか。	（　　），（　　），（　　）
6　クマは故意に人を襲うと思いますか。	はい　　いいえ
7　クマは増えていると思いますか。減っていると思いますか。	増，　変らない，　減
8　クマは自然の中に必要な動物だと思いますか。	必要，　不必要
9　クマを保護すべきと思いますか，撲滅した方がいいですか。	保護，わからない，撲滅

表5　クマに関するアンケート回答者数

地域		市街地		山麓の町		山村			合計（人）
		金沢	小松	鶴来	辰口	白峰	尾口	吉野谷	
性別	男	27	14	11	11	8	6	11	88
	女	25	21	14	20	11	7	11	109
合計		52	35	25	31	19	13	22	197
		87		56		54			

2　結　　果

設問1では，回答者がどれくらい山に接する機会があるかを知ろうとした。結果は表6のとおり，

表6　ツキノワグマに関するアンケート回答結果

設問	回答	市街地 金沢市・小松市 N=87	%	山麓の町 鶴来町・辰口町 N=56	%	山村 白峰村・尾口村 吉野谷村 N=54	%	計 N=197	%
1　よく山へ行きますか									
	行く	26	29.9	15	26.8	19	35.2	60	30.5
	行かない	61	70.1	41	73.2	35	64.8	137	69.5
2　野生のクマを見たことがありますか									
	有	3	3.4	6	10.7	16	29.6	25	12.7
	無	84	96.6	50	89.3	38	70.3	172	87.3
3　あなたの市町村にクマがいますか									
	いる	10	11.5	34	60.7	48	88.9	92	46.7
	いない	77	88.5	22	39.3	6	11.1	105	53.3
4　クマは有害な動物だと思いますか									
	はい	35	40.2	36	64.3	16	29.6	87	44.2
	いいえ	52	59.7	20	35.7	38	70.4	110	55.8
6　クマは故意に人を襲うと思いますか									
	はい	29	33.3	11	19.6	7	13.0	47	23.9
	いいえ	58	66.6	45	80.4	47	87.0	150	76.1
7　クマの数は増えてると思いますか									
	増	15	17.2	27	48.2	8	14.8	50	25.4
	変らない	29	33.3	11	19.5	26	48.1	66	33.5
	減	43	49.4	18	32.1	20	37.0	81	41.1
8　クマは自然の中に必要ですか									
	はい	44	50.6	20	35.7	27	50.0	91	46.2
	いいえ	43	49.4	36	64.3	27	50.0	106	53.8
9　クマを保護するか撲滅か									
	保護	45	51.7	18	32.1	21	38.9	84	42.6
	わからない	34	39.1	28	50.0	30	55.5	92	46.8
	撲滅	8	9.2	10	19.7	3	5.6	21	10.6

註：設問5は表8で整理した。

山へよく行くと答えた人は全体の30.5%であり，大きな地域差は認められなかった。山に行くと回答したものにその内容を問うたところ，60人のうち山菜・キノコ採りが最も多く21人（35%），林業関係など仕事として17人（28.3%），登山・ハイキングに9人（15.0%）であった。特に金沢・小松といった市街地に在住する回答者の多くは，山の仕事といった実質的な山地労働は少なく，レジャー的要素を含むものが多いという傾向がみられた。それに対して，山麓から山村部に在住する回答者の多くは，その地域が山だという意識が少なく，レジャー的要素を含むものよりも生活の一部となっている枝おろし，下草刈り等の山林作業が多かった。

次に設問2で野生のツキノワグマを見たことがあるかを聞いたところ，25人（12.7%）の人が見たと答えている。市街地の人の3.4%に対し，山村部では29.6%が見た経験を持っている。

設問3で「あなたの市町村にクマがいると思いますか」の問に対しては，金沢市・小松市ではクマ

が「いない」と答えた人が多いのに対し，他の町村では逆に「いる」と答えた人が多かった。石川県内で常時クマが生息している地域は，金沢市，辰口町，河内村，吉野谷村，尾口村，白峰村，鳥越村，小松市，加賀市，山中町であり，鶴来町地内へも時々出没することがある。今回の調査地は全てクマの分布地をもつ市町村であった。つまり，山村在住の回答者の多く（88.9%）はクマが生息しているという実感が高く，一方市街地在住の回答者は，クマが身近に生息しているという意識が低いといえる。

設問4は，「クマは有害な動物と思いますか。」という問で，クマに対する害獣の意識の深さを知ろうとした。有害だと感じている人の割合が高かったのは山麓地帯の64.3%で，次いで市街地の40.2%であり，山村では29.6%と低く，クマを有害と思っている人は少い。

特に辰口町ではクマの猛獣意識の強いことはアンケート調査中に感じとることができた。辰口町では1979年11月にクマが民家の軒先まで姿を見せ，2人に重軽傷を負わせた事件が，住民の記憶に新しいことが，クマに対する恐怖のイメージを強めていると考えられる。

クマは有害と答えた87人にその害の内容を問うたところ(表7)，人を襲うと答えた人が56人(64.4%)を占めた。ここでも辰口町で他の町村より率が高かった。山村では人を襲うと答える人が少なく，市街地でかなりの人がそのような意識をもっていた。アンケート聞きとり中に感じたことは，特に市街地住民の中には，ツキノワグマをヒグマなど人を襲ったと伝えられることの多いものと区別していない人の多かったことである。

有害意識の内容で次に多かったのは畑作物と果樹を合せて農作物を荒らす23人(26.4%)であった。数は少ないものの山村で杉の樹皮を剝ぐといった人4人（4.6%），中間帯で養蜂に被害があると答えた人が2人（2.3%）あった（表7）。

設問5では，クマの食性に関する意識を「クマはおもに何を食べていると思いますか」と聞いたところ，表8のとおり多くの食物があげられた。最も多かったのはドングリ，クリ，クルミ等の木の実113人（57.3%）次いで柿，アケビ等果物26人（13.2%）と合計すると139人（70.5%）が果実をあげている。しかし，第3位にウサギ等けもの15.1人（7.7%），第5位に魚8人（4.1%）があらわれていることは，ここでもヒグマとの混同がなされていると考えることができる。第7位までの木の実，果物，木の芽，草，農作物といった植物食をあげた人は158.9人（80.7%）に対し，動物食は23.1人（11.8%）であった。なお，その他にまとめたものの中には，アリ3.7人(1.9%)木の皮3.8人(1.9%)，ハチミツ3.1人（1.6%）などがあった。

設問6で「クマは故意に人を襲うと思いますか」と聞いたところ，150人（76.1%）が故意には襲わないと答えている。故意に襲うと答えた47人（23.9%）からも，親子グマの場合とか，突然現われて驚いた時というように，条件付き

表7　クマは有害と答えた人の害の内容

順　位	市街地	山麓の町	山　村	計	
	人	人	人		%
1　人を襲う	21	27	8	56	64.4
2　農作物を荒す	13	6	4	23	26.4
3　樹皮を剝ぐ	0	0	4	4	4.6
4　養蜂箱を荒す	0	2	0	2	2.3
5　その他	1	1	0	2	2.3

表8　「クマはおもに何を食べていると思いますか」（設問5）の回答

食　物	市街地	山麓の町	山　村	計	
					%
1　木の実	50.5	28.1	34.4	113	57.3
2　果　物	11	11.7	3.3	26	13.2
3　けもの	8.8	5.8	0.5	15.1	7.7
4　木の芽	1.5	3	4.3	8.8	4.5
5　魚	4.8	1.5	1.7	8	4.1
6　草	2	1.5	3.1	6.6	3.4
7　農作物	2.5	2	0	4.5	2.3
8　その他				15	7.5

註）1人で複数の食物をあげた場合には案分した。
その他にはアリ，木の皮，ハチミツなどが見られた。

で襲うといった人が多かった。特に山村の人達からは，クマは本来おとなしく，クマの方から攻撃してくることはないという言葉をよく聞いた。

地域別にみると，市街地の住民には故意に襲うと答えた人の割合が33.3%と高く，山麓の町では19.6%，山村では13.0%と低くなった。

設問7でクマの数の増減を聞いた。全体では81人（41.1%）の人が減っていると思い，50人（25.4%）が増えていると思っている。クマが減っていると思っている人が全体では多かったのは，道路や林業などのクマの生息地の開発が進行しており，そのためにクマが減少傾向にあると考えている人が多いとみることができる。しかし山麓の町だけでは，クマは増えていると思う人の方が多く，前述のように近年の出没事件増加の印象が強いと考えられる。

設問8の「クマは自然の中に必要な動物と思いますか。」に対して，必要でない（53.8%）と答えた者が必要（46.2%）と答えた者をわずかに上回った。不必要と答えた人の中には，日常生活には特に関係ないと言いながらも，熊の胆の薬効や毛皮の価値などを知っている人が多かった。やや答えにくい問題であったためか，この設問に関連して，被害がなければ動物園などではかわいい存在で必要だという回答も見られた。

設問9の「クマを保護すべきと思いますか，撲滅した方がいいですか。」という問には興味ある回答が出た。まず，市街地である金沢，小松地区で他の地区に比べて保護意識が高い。

一方，撲滅するという意見の割合が最も高かったのは，実際の被害で騒ぎになっている中間地帯の32.1%であり，市街地では9.1%山村では5.6%と撲滅には消極的であった。クマを「保護」するか「撲滅」するかについて，意志を決定している人の割合は，市街地の60%中間地域では50%，山村では44%であり，都市部では意志決定をしている人が多いのに対し，山村ではどのように対処すればよいか迷っている人が多いものと考えられる。

また，撲滅派の多くは設問4のクマは有害動物であると答え，設問6でクマは故意に人を襲うと回答したものが多かったのは当然のことのようである（表9）。

以上をまとめてみると全体的にツキノワグマのイメージに混乱が生じている。特に市街地区の金沢，小松などがヒグマのイメージと混同して考えているようであった。居住地域などによってクマのイメージに差が出ることは，当然とはいえ興味深い，また，「怖い」，「悪い事をする」から「撲滅」という短絡した思考する人は少なく，むしろツキのワグマが「減っている」との認識をもっている人の中に「保護すべき」と考える人が多かったことも事実である。

表9　アンケートにみられる保護・撲滅の答と他の項目との関係

保護か撲滅か		性別		1 山に行くか		6 人を襲うか		7 クマの数は		4 害獣か	
		男	女	は い	いいえ	は い	いいえ	増	減	は い	いいえ
保護	84	40	44	26	58	16	68	11	47	28	61
(%)	(42.6)	(45.5)	(40.4)	(43.3)	(42.3)	(34.0)	(45.3)	(22.0)	(58.0)	(26.4)	(55.5)
わからない	92	34	58	27	65	21	71	27	23	47	45
(%)	(46.7)	(38.6)	(53.2)	(45.0)	(47.4)	(44.7)	(47.3)	(54.0)	(28.4)	(54.0)	(40.9)
撲滅	21	14	7	7	14	10	11	12	4	17	4
(%)	(10.7)	(15.9)	(6.4)	(11.7)	(10.2)	(21.3)	(7.3)	(24.0)	(4.9)	(19.5)	(3.6)
計	197	88	109	60	137	47	150	50	81	87	110

Ⅲ 考　　察

1　出没と被害

クマが出没したからといって，またカキ，クリなどが被害を受けて新聞記事になる場合は，クマの分布地域周辺部か通常クマの生息していない地域に限られている。手取川上流部等のクマの生息数の多いところでは、人家近くや道路へクマが出ても，人はそれほど騒がず，新聞記事にもならないことを表わしている。また，白山登山中のクマ遭遇などもニュース・ソースになっていない。

人身被害の発生も，クマ分布域の周辺部で多い。これは，その地域への人間の出入りが多いことが第二の原因であると思われる。また，人身被害を発生させているクマには仔づれの母グマが多い。低山や人里に近いところで，木の根もとなど簡単な土穴に越冬しているクマには仔づれやその冬に出産したクマが多いという見方がある。また春はもっとも気軽に山菜採りなどで山へ入る季節でもある。ほとんどの人身被害が，分布周辺や低山で春に発生しているのはこれらのクマと人間双方の条件が重なりあって衝突の原因となっている。

東海地方から西日本にかけて大きな被害となっている植林した針葉樹の皮剝ぎ（渡辺・小見山，1976；WATANABE,1981）については，石川県内で20年間に1例がとりあげられているにすぎない。白山山麓でも，白峰村，鳥越村，尾口村等で林業関係者から直接話を聞くと，杉の皮がクマによって剝がされているという。しかしながら，石川県及び富山県では，皮剝ぎ害が林業事務所へ届けられたり，苦情や対策の要望として出されたことは一度もなく，当然のことながら統計されたことは全くない。山林にクマが生息しているのはあたりまえだという山村住民の意識と見ることもできる。

総合して，石川県ではクマの被害として最も問題となるのは，出没による恐怖とまれにおこる人身被害であるといえる。

1982，83年はクマの出没騒ぎが多く，いわゆる異常出没として話題になった。秋に出没が多い年には，山のブナの不作と重なっていることが多い。しかし晩春から夏の出没については，クマの食物となる植物量の少ない端境期と一致すると考えられるが，年変動については決め手となる原因はつかめていない。日光ではミズナラの不作が体内脂肪の蓄積を不十分にし，冬を越えてこれらの脂肪を使い果たす春から夏の栄養不足が出没増加に結びつくという考え方が出されている(羽澄，私信)。しかし白山においては，前年秋の餌植物の不足と春から夏の異常出没との相関が明瞭でなく，今後に残されたテーマである。

近年，加賀平野近くの低山にクマが多くなったという地域住民や猟師の話がある。これにはクマの生息個体数が増加したと考える人もある。しかし1965年頃から狩猟の道具やクマ猟に参加する猟師数があまり変っていないこと，捕獲数に急激な増加や減少の傾向が見られないことから生息数の大きな増加は考えられない。(水野・花井，1983)。この地方では1960年頃から焼畑耕作や炭焼きが急速に衰退し，山間小村が次々に廃村となり人間の生産活動の最前線が大きく低地へ移動したために，クマの通常の行動範囲を低山まで拡げることになった。これら一連の森林環境の変化が比較的大きな村や町の近くでのクマとの遭遇の機会を増加させているものと考えられる。

2　クマに関する認識

クマは通常の人の生活地や農業地に生息していないために，猟師等一部の人を除いて接触の機会は極めて少ない。アンケートをみても，野生のクマを見たことがあるという人は12.7%である。このようにあまり身近な動物でないために，一般的知識と情報の不足が目立ち，アンケート結果や新聞記事の中にも，クマの生態や習性の一部が誇張されていたり，明らかに誤解されていると思われるものがしばしば見うけられる。

アンケート結果から，クマについての知識と関心度を市街地，山麓の町，山村のそれぞれの住民間で比較すると，分布（設問3），食性（設問5），習性（設問6）のどの点についても，山村住民が最も正確な知識をもっていた。また，クマの生息数についての生活実感は，身近に被害が生じている地域，つまり中間地域で増加しているとの意識が最も強く，有害，不必要の意識も同様の傾向であった。クマが比較的身近な存在であり，見たことがあるという人の多い山村部でクマについての知識が正確である割合が高いことは，本人の経験あるいは家族や隣人からの情報によると考えられる。一方，山村以外，特に中間地帯での知識の誤りの多いことは何に由来するのであろうか。

アンケートにみると，住民がクマの主要食物と考えているものの中に動物性のものがかなり多く見られる。ツキノワグマは夏にハチやアリを採食することは多く報告されている（山本，1973）が，魚や哺乳類を捕食することはほとんどない。(高田 1979，NOZAKI et al. 1983)。白山山系でも春の有害鳥獣駆除個体の胃内容から，ニホンカモシカとノウサギの毛が極めて稀に発見されるが，それらは捕獲したものではなく，雪崩等による死体を採食したものと考えられる。つまりツキノワグマは，いわゆる捕食による肉食をする動物ではない。一般住民にクマが肉食獣であるという誤解があるのには，一つはテレビ等でヒグマやホッキョクグマの肉食の場面を見ることで，これらのクマとツキノワグマとの混同がある。また，新聞等でしばしばクマが人を襲ったという表現が出てくることから生れた誤解も多いと考えられる。

今回収集した新聞の見出し等を見ると，クマの出没に対する恐怖，また駆除した場合には退治したという表現が多い。これらは直接関与した者にとっては決して誇張でないかもしれないが，クマと直接かかわりをもつことのない読者にとっては，クマの知識を得る大きな手がかりとなる新聞記事の87.8%（表1）がこの種のクマを恐怖の対象または有害獣として扱っている事件であり，影響は大きい。この傾向は別に調べている京都新聞でも同様(120件中113件94.2%）であった。

新聞記事の中にクマの大きさを示したものをまとめると表10のとおりになる。駆除したクマや被害者が目撃したクマの中に体長1.5mから2mのものがしばしば出現する。白山山系において筆者らがこれまでにクマの体長を実測する機会のあった 45 例の中では最大のものは141cmであり，これ以上のものは極めて少なく，大きくても150cmは越えないものと考えている。突然クマと出合った場合など大きく見えるのはやむを得ないとしても，実際は一まわり小さいものであることを一般の人に知ってもらう手段も必要かも知れない。また猟師間では捕獲したクマの大きさを，皮を引っぱってなめした長さでいう場合もある。まれに6尺（182cm）以上の皮のクマが出てくる。しかし，一般にはクマのような四足獣の体長は鼻先から尾のつけ根までを示すものであり，正確な表現を用いなければならない。

マスコミや各種社会教育活動の中で，クマに関する正確な知識と多様な考え方を普及することが，クマの保護管理を可能にする社会的背景を作る上に重要である。

アンケートの設問9（保護か撲滅か）は，やや極端な問いかけであったが，約半数がどちらともいえないという答であった。つまり住民の約半数は，保護か撲滅かの二者択一をせまられると，十分な知識と確たる意見を持たないために，判断を第三者にゆだねていると理解できる。ここで考えられる第三

表10　新聞に見られるツキノワグマの大きさ。

体　長	
m	例数
2.0	2
1.9	
1.8	1
1.7	
1.6	1
1.5	6
1.4	1
1.3	1
1.2	5
1.1	1
1.0	3
0.9	
0.8	
0.7	
0.6	
0.5	
0.4	1
0.3	1
0.2	
0.1	

者とは科学的客観的事実にもとずいた判断のできる機関でなければならない。

そして，クマの保護管理の方策を検討するにあたっては，害獣駆除か保護という硬直化した態度だけで把えるのではなく，現実の状況を正確に判断する必要がある。その地方のクマが絶滅に頻しているという極端な場合を除いて，白山のように地域個体群としての拡がりと個体数が維持されている場合には，狩猟獣として山の産物としてのクマや，山のシンボル又は神としてのクマなどの歴史的背景も含めて多面的に把えなければならない。

文　　献

林　　哲（1984）ツキノワグマの人身被害について――福井県における事例，哺乳動物学雑誌10（1）：55―62.

石 川 県（1983）石川の動植物，pp 117.

水野昭憲・花井正光（1983）手取川上流域におけるツキノワグマの狩猟形態とその変化，石川県白山自然保護センター研究報告9：77―84.

野崎英吉・古林賢恒ほか（1979）関東地方におけるツキノワグマの分布――アンケート聞きとり調査による――，哺乳動物学雑誌8(1)：14―32.

野崎英吉・水野昭憲（1983）ツキノワグマの行動域と日周期活動，石川県白山自然保護センター研究報告9：85―94.

NOZAKI E., S. AZUMA, T. AOI, H. TORII, K. MAEDA, and T. ITO (1983). Food habits of Japanese black bears. in C. Meslow, eds. Bears-their biology and management. Int. Conf. Bear Res. and Manage. 5：106―109

高田靖司（1976）長野県中央高地におけるツキノワグマの食性．哺乳動物学雑誌8（1）：40―53.

WATANABE, H. (1981) Black Bear Damage to Artificial Regeneration,IUFRO World Congress XVII, 581―586.

渡辺弘之・小見山章（1976）ツキノワグマの保護と森林への被害防除（II）京都大学演習林報告48：1―8.

山本教子（1973）ツキノワグマの食性――白山を中心に，白山資源調査事業報告（昭和47年度），45―59，石川県

湯浅純孝（1972）熊の異常出没，富山県自然保護協会報52：2―3.

Summary

In Ishikawa Prefecture, some black bear troubles happen in every year. This report shows tendency of the bear damages to human activities on the articles of the local newspaper during recent twenty years, 1964—1983, and discusses the recognition of the black bears among the residents from the interview method.

One hundred and seventy three articles on bears in Ishikawa prefecture were picked up from the papers. Seventy seven of them are about the bear appearences, 64 about the bear controls and captures, 22 about bear demages to farms, orchards and forests, 21 about bears behavior, 10 about injuries to human being and 3 about the protections of bears.

More than ten articles on the appearences of bears were seen 1970, 1971, 1980 and 1983.

The distribution of bear appearences were concentrated the peripheral zone of their habitats, and are also the borderland of men and bears. The number of the injuries to human being was the most numerous of the other cases of bear damages.

The recognition of the bears among the residents were studied from the interviews of 197 inhabitants from three different areas, the urban area i.e. Kanazawa city and Komatsu city, the foot of the mountain i.e. Tsurugi town and Tatsunokuchi town, and the villages between mountains i.e. Yoshinodani vllage, Oguchi village and Shiramine village. Nine questionaires on

experiences, knowledges and recognitions about wild bears, were prepared to ask to the residents.

From the result of the interviews, the residents in the villages between mountains had exact knowledges rather than the residents in the others areas. Some of people in the towns and the cities confused black bears with brown bears and thought that black bears were predatory animals. Many people in the towns of the foot of mountain in which most of bear troubles happened thought that the number of the bear population grew up and that bears were nuisances and terrible animals. We found out that the sizes of the bear on the newspaper were not exact in most case and a tendency to become bigger than the actual sizes. Nearly half of people had no answers to the question whether extermination or protection. These results show that many people entrust the bear management to the public organ which has the scientific and the objective data of the bear ecology and of the human activities.